第三章　神風黨の變

一、暴動の起因と其急襲

由來熊本は黨派を好み、黨派觀念の強き土地にて、明治初年の頃には夫々其の主義・學風・目的等に因つて學校黨・實學黨・勤王黨・民權黨の諸派が對立してゐた。

勤王黨は後に至り進取を主義とする者と保守を旨とする者との二派に分れ、世人後者を呼んで『神風黨』と稱す。蓋し黨人悉く敬神無二の人士にして、苟くも事を爲すには先づ其旨を神に告げ、神慮を伺ふを以て、斯く名づくるに至つたのである。一言にして言へば偏狹なる國粹主義者の團體にして、明治維新以來、舊制度續々廢止せられ、海外の新文明輸入せられて、政治・教育を始め萬般の制度漸く一變せんとするを見て甚だ快からず、明治九年三月廢刀令の實施せらるゝに及んで、其の義憤は頂點に達し、遂に『君側の奸を誅す』と號して亂を企圖するに至つたのである。國學者太田黑伴雄を中心とし黨人百八十餘名、至誠を以て結合し、其黨議黨談は親子兄弟の間と雖も極秘に附し居たるを以て、官民

0081

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

共に之を未然に偵知する者がなかつた。偶〻十月下旬藤崎神社に『日本攘夷』と題する諷刺書を献じたる者ありて、時節柄世人の注目を惹き、縣官之れが探偵の結果同黨員の手に出てたる事を知つた。茲に於て黨人等隱謀の發覺せんことを恐れ、二十四日急に飛檄して同志を糾合し、疾風迅雷的に事を擧ぐるに至つたのである。

（同夜營部村上新九郎は神風黨の擧兵に就て情報を得て大に驚ろき、遽かに安岡縣令の邸に至り、小關參事等と謀り、明日を待つて一網打盡すべく、談議半ばにして早くも暴徒の急襲を受けたのである。）

十月二十四日夜暴徒等は、三々伍々、容を忍び身を潛めて藤崎神社（今の森崎邸に在つた）附近の愛敬正元の家に會し、相率ゐて藤崎神社に詣で、主魁太田黑伴雄軍令を神前に宣べ、將帥・參謀を命課し、各隊の攻擊部署を定めた。乃ち、

將　帥　太田黑伴雄　加屋　霽堅

參　謀　上野　堅吾　齋藤求三郎　愛敬　正元

攻擊部署

少將種田政明ノ邸ヲ襲フモノヲ第一隊トス

0082

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

聯隊長與倉中佐ノ家ヲ襲フモノヲ第二隊トス
參謀長高島中佐（茂徳）（砲術ノ開祖高島秋帆ノ子息）ノ家ヲ襲フモノヲ第三隊トス
熊本縣令安岡良亮ヲ斬ルモノヲ第四隊トス
前八代縣知事太田黑惟信ヲ刺スモノヲ第五隊トス
砲兵營（今ノ檜原近）ヲ衝クモノヲ第六隊トス
此隊ハ即チ賊ノ中堅ニシテ太田黑・加屋ノ兩黨皆軍神ヲ奉ジテ之ヲ指揮ス
歩兵營（我歩兵第十三聯隊營）ヲ襲フモノヲ第七隊トス
花畑歩兵營（今ノ歩兵第二十三聯隊營ニシテ當時ノ第三大隊兵營）ヲ襲フモノヲ第八隊トス

二、營内の戰鬪

十月二十四日午後十一時三十分、陰暦八日の弦月既に西山に落ちて、風死し人定まり、營内寂として、唯だ衛兵の咳聲時々此の寂寞を破ぶるあるのみ。突如として兵營の西門外に騒音起る。衛兵何事ならんと、星明りに透かし見る間もあらばこそ、賊の第七隊たる富永守國、吉海良作等の七十餘人、物をも言はず營内に侵入して來た。會〻砲兵營の出火を報

0083

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ずる者あり、同時營内の各所に爆裂の音と共に默々火光を發す。蓋し彼等爆筒を舍内に投じたのである。風紀衛兵喇叭手は直ちに非常號音を吹奏せんとしたが、一二聲にして一刀兩斷せられ、聯隊週番大尉福原豊功亦背部に重傷を負うて倒れた。

各中隊は異變を知り、速かに舍外に出て、整列せんとするや暴徒は已に西門側の彈藥庫を占領し、次で喚呼し刀、槍を揮つて整列中の各中隊を襲撃した。其の裝束、或ひは甲を冠るあり、或ひは烏帽子直垂を着る者あり、或ひは常服に短袴を穿ちて輕快を主とする者あり。異容異態を極むる中に、各自白布の小片に勝の字を黑書して左肩に着して相票とし、武器は刀、槍、長刀等悉く白兵にして火器を携ふる者などは殆んど無かつた。

事餘りに唐突なる上に四邊暗黑なる爲め、敵の兵力を知る能はず、我兵直ちに銃劍を以て防戰すと雖ども、死を決せる暴徒の亂撃なか〳〵に當り難く、立所に多數の死傷者を出すに至つた。依つて一時舍内に退いて守らんとすれば、賊既に入口に在つて我を要撃し且つ聯隊本部及び第二大隊の第一・第二・第三中隊兵舍に火を放ち、炎々たる火焔と濛々たる黑煙とは營内を蔽ふ。此時第二大隊には一發の彈藥無く、殆んど策の出づる所を知らず、徒らに暴徒の怒號駈突に委し空しく兒刄に斃れ或ひは焔烟裡に憤死した。第二大隊の第四中

0084

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

隊（先の第八中隊のとなり、當時は中隊號は聯隊を通じて一連につけずして大隊毎に一連の番號をつけて居た）の週番士官多羅尾少尉試補（今の見習士官）は第二大隊の殘餘の兵を糾合して舍前の楠樹下に圓陣を作り銃劍を揮て奮戰したが長槍、薙刀を携へた賊の一群の爲に敗られ多羅尾少尉以下名譽の戰死を遂げた。

吁亭々たるこの大楠よ奇くもその昔楠氏が誠忠の餘薫に香りて今ここに我が忠勇なる先輩將士が奮戰最後の楯となつたのである。

聯隊歴史の存せん限り永久に榮え行く常綠の色は、實に彼等將卒の鮮血に培はれて居るのである。

銀杏城頭身を光輝ある我が歩兵第十三聯隊に奉じて護國の大任に就く將士よ。

この大楠の下を通るときは必ず仰いで一度は其常綠の色を賞し、伏しては二度先輩將士が義血の餘瀝を忍べ。其間無言の中に絶大の敎訓を享けるであらう。

常綠の色は年々歳々愈〻榮え榮えて行くのである。吁吾人は一度軍國急を傳ふるの朝には、この常綠の色よりも更に濃き且赤き誠の色を現して護國の大任を盡し以て聊か先輩勇士の靈に地下に相對するの覺悟がなくてはならぬ。

『將士奮戰の跡』なる碑は小い。即ち小なりと雖も吾人後輩が、先輩勇士の義烈を慕ふべく

0085

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

精神的に之が永久の記念たらしめべく徹頭徹尾兵力を以て建設したものである。

第一大隊の各中隊は、幸ひに射擊用の殘彈百餘發を有し、火力を以て防戰したるを以て、暴徒も容易に接近せず兵舍の燒失を免れた。

〔佐武中尉等の奮戰〕　中尉佐武廣命及び少尉試補沼田尚蕭此夜各其寓にありたるが、營内に出火を聞きて直ちに駈付くる途中、法華坂にて、敗兵十餘名三々伍々遁走し來たるに會し、始めて暴徒の來襲を知る。乃ち叱咤して敗兵を收容し、立どころに十有六名を得たるものゝ、一發の彈藥も無く、如何にすべきかと躊躇しある時、御用商人立山吉像なる者來りて、彈藥百八十發を贈つた。中尉以下勇躍奮進、佐武中尉は西裏門より、沼田少尉試補は南方非常門より、二隊に分れて突入し、巧みに暴徒を狙擊した。暴徒等不意の射擊に會ふて狼狽し、左右に散亂す。兩隊此の機に乘じて突進し、彈藥庫を奪還し、更に友岡・佐土原南少尉の指揮する一隊と連絡した。

此時、負傷せる聯隊長與倉中佐、身を人夫にやつせる參謀兒玉少佐（源太郎、日露戰爭滿洲軍總參謀長）等、相前後して來會した。

〔第三大隊の來援〕　當時第三大隊は下馬橋（今の御幸橋の東側）外御花畑に在つたが、其の電話の蓄藩

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

主居住の跡なりし爲、暴徒も稍や躊躇せるものゝ如く、其の行動他方面に比し活潑ならず、只三々伍々營外に在りて窺ふに過ぎなかつた。衛兵は直ちに之を擊退し、各中隊兵を整へて警戒しつゝある處に、大隊長心得小川大尉登營した。大尉乃ち直ちに斥候を各方面に派して偵察の結果、事態容易ならざるを知り、直ちに應援の爲め出動した。即ち小島中隊をして慶宅坂の暴徒（彼等の一隊山砲一門を奪ふて同所に陣方に砲撃を開始せんとしてゐた）を擊たしめ、北川中隊をして砲兵營に增援せしめ、自から第二、第三中隊を率ゐて鎮臺前に到り、種田少將及び高島參謀長の宅に各若干の兵を分遣し、其の主力を以て聯隊營内の暴徒を攻擊した。時に夜十二時。此際理門の方向より、我が軍旗を擁して意氣揚々と進み來たる暴徒の一群があつた。（是れ即ち奥倉殺隊に邸を襲へる第二隊なり）小川大尉之を見て大に怒り、猛烈なる射擊を加ふるや散亂して營庭に走つた。大尉曰く、

『死を以て彼の軍旗を奪還せよ！』

と、一隊をして之を追擊せしめた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三、軍旗の亡失及奪還

當夜の奇襲は、暴徒側より謂へば各隊共の功を奏したと言へる。乃ち砲兵營を燒きたるを始めとして、司令長官種田少將及び參謀長高島中佐を殺害し、縣令邸を襲へる者は安岡縣令並に小關參事等を斬つて、而して其の第二隊は豫定の如く、京町柳川町なる當聯隊長與倉中佐邸を急襲した。其の頃軍旗は、毎に聯隊長自ら奉護の任に當る爲、聯隊長邸に奉安せられてあつた。軍旗步哨急に臨み單身能く奮鬪すと雖ども、衆寡敵せず、漸次後方に追詰められ、遂に脚を失して斷崖上より墜落した。聯隊長亦赤手を以て格鬪の結果負傷し、軍旗は一時暴徒の手に移つた。

軍旗を奪取した第三隊の徒は、之を奪して意氣揚々、轉じて我が兵營に侵入して第七隊と合した。聯隊長與倉中佐は負傷せるにも拘らず、服裝を變じ名を佯りて屯營に潛入し、軍旗を奪還すべく其の跡を追ふた。

第一大隊第三中隊に隈部幸作と云ふ勇卒があつた。中隊兵舍に在りて防戰中、賊徒の一人我が軍旗を奪して同兵舍の窓下を通過するを認め、『是は實に由々敷き大事である』と、直ち

0088

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に舍内より手を伸べて之を取らんとし、死力を竭して格闘の末、遂に軍旗を奪還して、佐武中尉に呈した。當時尚ほ亂戰中なるを以て、中尉之を完全に奉護するの困難なるを察し、軍旗を分解して、旗布を上衣と肌衣との間に縫ひ、菊花章を衣襟に戴めた。然るに中尉は奮戰の結果當時指と頸とに刀創を受け居たる爲め、鮮血滴りて軍旗を染むるに至つた。

（是れ即ち『血染の軍旗』として世上に喧傳せる由來である）

單身奮闘して、軍旗を敵手より奪還せる隈部幸作の剛勇と、亂戰の裡に在りて克く奉護の任を完うしたる佐武中尉の機智と沈着とは、吾聯隊史上に特筆して、長へに其の勳功を傳ふべきである。

四、鎭　壓

戰闘は午後十一時半頃より、翌日午前一時頃まで、即ち約一時間に亘りて行はれたが、此間漸次我は隊伍を整へ指揮を統一して攻勢に轉じ、暴徒等は其の首魁加屋霽堅以下二十三名の死屍を營内に遺棄して潛走し、將帥の一人太田黑伴雄亦營内に於て負傷し法華坂門外に死す。

0089

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敗殘の暴徒の中、其の一部藤崎に集合せるものは小島中隊の追擊を受けて散亂し、他の一部は北岡佑藩主邸に走りて、縣士の應援を乞うたが、縣士之に應せず、我が追擊に會うて、或ひは自刄し或ひは身を以て逃れ、午前三時臺下略ぼ鎭靜に歸す。

二十六日殘敵有吉村に集合すとの情報に接し、林少佐第二大隊の二中隊及び砲兵二分隊を指揮して、拂曉之れを襲擊したるも已に遁逃して在らず。次で金峰山・松尾村を搜索し、二十七日歸營し、鈴木中尉(重)亦一分隊を率ゐて河內附近に到り、爾後三十日に至る迄各所を搜索して三十一名を捕縛した。

此の外自首して出でたる者三十二名、各所に於て自刄したる者八十七名、此の中岩間邸にて自刄せる上野堅吾等九名の最期は、其の心情の潔白なる、態度の堂々たる、實に嘆賞に値するものであつた。二十八名は當夜戰死した。

之に對する臺下將校以下の損害は

△戰死　種田少將及高島中佐以下將校同相當官十二名、下士以下五十三名　計六十五名

△負傷　與倉中佐及砲兵大隊長塩谷大尉以下將校同相當官十三名、下士卒百九十三名　計二百六名

0090

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五、志士の精神

吁盡忠報國の至誠獻身殉國の大義に燃ゆる熱烈の志士百八十有一名が、可惜大道の理非に踏み迷ひて、狂闘暴擊、一夜空しく銀杏城頭の露と消えたのは、實に今更ながら惜みても尚餘りあることである。

時と境遇とこそ異なれ、彼等が忠義の大本に至りては、楠氏の至誠や赤穂義士の義烈と共に、實に我が日東帝國の精華を發揮したものである。

時代の過渡に禍せられて、終に抑ふべからざる熱烈殉國の意氣を、誤れる方面に迸發して曝屍永遠に無限の遺恨を城頭の秋風に埋めたるも、其忠・其義は實に帝國史上に萬丈の氣を吐くものである。

吾人は靜慮深省克く是等先輩志士の至誠に感激し、建國以來數多國難の大義に殉した先輩勇士に對すると同樣に、絶大の尊敬、愛慕の至情を捧ぐると共に、殊にはゆかり深き我が城頭の健兒は寤寐の間も尚克く是等志士の跡を追ふて、練武修養を重ね、やがて來らむ其の日の大覺悟をきめねばならぬ。

0091

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp